



東海大学教授

山下泰裕さん

2007年11月21日、弁護士会館クレオで行なわれたスポーツ法シンポジウムでの基調講演の後、熱い想いを語っていただいた。山下さんは、2006年にNPO法人柔道教育ソリダリティーを設立して様々な活動をされている。その詳細については、是非、山下さんの公式ホームページ (<http://www.yamashitayasuhiro.com/>) をご覧いただきたい。

(聞き手・構成：古椎 庸文)

—他のスポーツと比べて柔道の特徴はどういったところにありますか。

スポーツでなくても、何の道でも、他人のできないことを成し遂げていく過程において人間的にも成長していく、それは同じだと思います。ただ、創設者嘉納治五郎師範が柔道を創設した目的の中に明確に出ていると思います。それは、世の中を補益する、これは明治の言葉ですが、柔道を通して心身を磨き高めて、社会に有為な人材を送り出していくということです。

—柔「道」ということですか。

嘉納師範は、柔道で培ったものを日常生活に生かす、人生に生かすという意味で道と名づけたのです。日本の場合は、学校体育が中心になっていろいろなスポーツが発展してきているので、どのスポーツでも教育的価値を大事にしていますが、柔道の場合は、創設者がそのことを明確に理念として持っているというところが違うと思います。

—近時はどうでしょうか。

近時は、柔道も競技化して、勝ち負けだけにこだわって、マナー、モラルが非常に低下しました。そ

の反省から、2001年から「柔道ルネッサンス」、もう一回、創設者の理想の原点に戻って、柔道を通した人づくりを大事にしていこうという動きが起きてきています。創設者の確固とした想いがあるので、それをもう一回、大事にしていこうとしているのです。

—その点で、外国との温度差はどうですか。

私は、まず自分たちがきちんとした行動を起こし、実践して、成果があがってからと思っています。ですから、具体的には、まだそれほど多くは海外に発信していません。しかし、ブラジル、ロシア、オランダ、ドイツなど、いくつかの国がこれに共鳴して、このような運動を起こし始めています。

—自分の足下からおっしゃいましたが、実は、今日、一番お聞きしたかったのは、いつも素晴らしい笑顔をしていらっしゃる理由なのですが…。

昔、まだ高校生のころ、全日本の柔道合宿に参加していたとき、練習が終わった後、オリンピック、世界選手権で活躍している大選手から、「大ちゃん、本当にお前柔道が好きだよなあ」と言われました。「好きです。でも、どうしてですか」と言ったら、「こ

んなに厳しい練習が終わってクタクタなときでも笑顔を欠かしていないからね」と言われたことがあります。私が普通にしているときに、それが笑顔に見えるようです。

— いいですねえ (笑)。

もう一つは、自分の雰囲気や表情とかが、相手に対して影響を与えますよね。だから、何か影響を与えるのであれば、周りに対していい影響、いい雰囲気を与える人間でありたい。これは簡単ではなく、目指していることという意味で言いますが、私は教育の世界で生きていますから、私が入っていくと、ピーンと緊張感が漂ったりするのではなく、私がそこに顔を出した瞬間に、パッと私の顔を見たいいろんな人の目が輝いて、生き生きする、そういう人間になれたらいいなあとと思っています。一番大事にしているのが、生き生きと生きる。「生きる」が3つなんですけど (笑)。自分も生き生きと生きたいけど、私の周りにいる人たちも生き生きと生きてほしいということなのです。そういうことを大事にしていたので、今は、割と自然と人前で笑顔ができるようになったのかなあと思います。

— 素晴らしいですね。

もう一つ言うと、自分に起きることで、無駄なこと一つもない。自分に起きてくることは全部必要があって起きるんだと。そうすると、何が起きたかではなくて、うれしいことも、悲しいことも、つらいことも、楽しいことも、いろいろなことが起きてくるけれども、それをどう捉えるかということが大事なのです。いいことがあろうと、悪いことがあろうと、何があろうと、全部、自分にプラスになる、自分の生き方の活力になる、エネルギーになる、そういうふうにつけるのが、やっぱり、一番理にかなった生き方ではないかと。実際には、ムツとしたり、カーッとしたりすることもあります。戻りが早いような気がします。

— なかなかできないときもありますよね。

これは、私の特殊な生き方かもしれませんが、人生の前半で、柔道選手として、多くの戦いで勝ってきました。多くの戦いで、相手の夢や希望を打ち砕いてきました。だから、自分の心の中に、十分人生を戦ってきた、だから、もう、他人と競うことは基本的にしたくない。できるだけ、自分の目指していることに近づくことが多くの人の魅力になるような生き方をしたい、私と戦って敗れた人たちが夢破れた姿ではなくて、あの山下と戦ったんだということ誇りに思えるような、そのような生き方をしたいと思っています。ただ、これは、教育の世界にからできるのだと思います。

— 柔道を通して伝えたいものは？

柔道を通して培ったものを人生に生かしたときに、初めて本当の柔道家になるのだということです。道場ではみんなきちんと挨拶できる。それが家庭の中で、学校でできて初めて本当の「礼」であると思います。人生の中では厳しいこともつらいこともある、柔道で投げられても起き上がっていく、怪我しても立ち上がっていく、同じだと思います。柔道では、相手を思いやる心が大事であって、大事なことは強くなることだけではない。そこで得たものを人生に生かしていく。それが柔の道なんだと。もう一つ言うと、スポーツで最も大切なのは、フェアプレーの精神、スポーツマンシップですが、これも、柔道と同じように、単に、コートの上で、グラウンドの上でのフェアプレー、スポーツマンシップではなく、日常生活の中でもフェアプレーの精神を発揮していこうじゃないかと、それが、一番伝えたいメッセージの一つですね。それから、スポーツを通して、きまりを守る、仲間と力を合わせる、我慢するという人間として一番基本的な部分を再確認して、それを子ども達に伝えていきたいと思っています。

— NPO 法人柔道教育ソリダリティーを設立された

経緯は？

トヨタの奥田碩会長側からの提案でした。当時、私は、国際柔道連盟の教育コーチング理事をしていましたが、国際柔道連盟に加盟している195の国や地域の中には貧しい国が多く、そういう国への柔道普及を通して、柔道の心や日本の心を世界の人達に伝えていきたいという想いで頑張っていました。そのとき、奥田会長サイドから、いいことをしているがその金集めの方にだいぶ時間を使っているので、小さくてもいいから組織を作ってやったらどうか、僕の名前も使っていいよと言われたのです。奥田会長は、2006年12月の第1回目のNPOの記念講演会で講演して下さいました。

ですから、このような活動をするなど、自分でも思っていなかったのです。全日本の監督の任期が終わった後、私は日本柔道の強化、それも、北京やロンドンオリンピックなどの短期の強化ではなく、もっと先のことを考えた強化を考えていました。余りにもマナー、モラルの低下している日本の柔道界、勝ち負けだけではないぞと。創設者嘉納治五郎師範の目指していたのは人づくりだと、ここに大学の授業以外の自分のエネルギーをつぎ込んでいこうと思っていたのです。そこに、是非国際柔道連盟の理事をやってくれないかという依頼が来て、これは受ける以外の選択肢はないなあと思い、引き受けてやっていると、段々変わってきて、プーチン大統領との出会いや日中交流や、奥田会長との出会いなどになってきたのです。ですから、NPOを作るどころか、国際柔道連盟に出て行くことさえも、自分の中では頭に描いていたことではないのです。

——もともとは日本の柔道界をと思っていたわけですね。

はい。そのことを通して恩返しをしていきたいと。日本の柔道界がもっともっと人づくりの団体になっていかなければならないという想いだったのです。だから、世界に対しての視野があったわけではないのです。でも、とてもやりがいのあることで、今、考

えてみると、目の前にドアが開いていたのですね。で、入って行ったら次のドアが開いているのです。こんなことができるのなら、これをやったらよくなるなあと思ったときに、それを開けるドアが…。私は、嘉納師範と東海大学創設者の松前重義先生、2人の先生が喜んでくれるような仕事がしたいと思っていました。だから、これをしたら喜んでくれるかなあ、これどうかなあって思ってやっていたのです。でも、おふたりが私を使っているんじゃないかって思ったこともあります（笑）。ですから、自分がやったのだと思ったら余りにも傲慢になってしまうと思います。要するに、自分の力など、いかほどのものでもなく、様々な人によって支えられていると思います。

——現在の目標は？

今は私の第3の人生だと思っています。第1の人生が柔道選手として、第2の人生が現場の柔道の指導者として、そしてシドニーオリンピックの全日本監督が終わった後は、第3の人生だと思っています。第2の人生までは、自分なりの確固たる目標を持って、それを目指して頑張ってきました。今は、そういう具体的な目標はないですね。流れの中で、少しでも社会のお役に立てることができればと思っています。自分の中では、2年、3年のプロジェクトは持っていますが、全体としては、自然の流れに沿いながら、自分の信条と照らし合わせながら…。

——日本の柔道を強くしてほしいというファンもいると思いますが…。

確かに、日本に勝ってほしいですが、他の国の選手も同じ柔道の仲間です。息子と従兄弟の違いだと思います。日本が負けると残念ですが、勝った人に対してよかったなあという気持ちはまったく変わらないですね。戦っているときには息子に勝ってほしいけど、従兄弟は敵じゃないですよ。仲間の輪をもっと大きくしていきたいと思っています。

人生の前半で、私は柔道選手として、多くの戦いで勝ってきました。私と戦って破れた人たちがあの山下と戦ったんだということを誇りに思えるような生き方をしたいと思っています。



—今の夢は？

世界は多様で、それぞれ独特の伝統や文化があります。そういう中で、世界が平和の方向に進んでいくためには、日本が大事にしてきた和の心が大事だと思います。相手を思いやる心、惻隱の情、かつての日本が大事にしていた、そういったものが世界に広がっていくことが、人類が幸せな方向に進んでいくために大事であり、さらには、人類だけではなく、すべての動植物と調和して生きていくことが大事なのではないかと個人的には思っています。私は柔道という切り口でしか活動できませんが、日本の和の心、これが世界平和につながると思っていますので、それを小さなところからですが、発信していきたいと思っています。ありがたいのは、大学がこういった活動を理解して支援してくれることです。

—お祖父さんのお話もお聞きしたかったのですが…。

私が初孫で、全面的に応援してくれました。祖父の教えで心に残っているものは、「草木に劣るなかれ」ということです。草や木だって、水をやったら花や実を結ぶ。要するに、感謝の気持ちを忘れるな、

自分1人で生きているわけじゃないぞってということじゃないかなと思うのです。

—弁護士に期待することは？

スポーツには社会的な役割がありますが、ドーピングの問題、興行権の問題、選手の肖像権、著作権等、我々の力だけでは解決できない様々な問題が増えてきています。スポーツ活動を支えてより健全な社会が建設される方向で協力し合いながらやっていければと思っています。

—本日は、お忙しいところ、素晴らしいお話を本当にありがとうございました。

プロフィール やました・やすひろ

1957年熊本県生まれ。84年ロサンゼルス五輪柔道無差別級金メダリスト、同年、国民栄誉賞受賞。全日本選手権9連勝をはじめ、85年の引退までに203連勝を記録。引退後は、文部科学省中央教育審議会委員、全日本柔道連盟強化男子監督など要職を歴任。現在、東海大学教授、NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長、神奈川県体育協会会長、全日本柔道連盟理事。

*今回から、インタビューは原則隔月掲載となります。